
隣のクレイジーガール～藤田と宮島～

とまとまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のクレイジーガール〜藤田と宮島〜

【Nコード】

N5994Q

【作者名】

とまとまと

【あらすじ】

隣のクレイジーガール〜藤田と宮島〜の番外編です。

大体小学生の初めの、比較的少しまとめた話（嘘だったらすみません）。

おまけ？（前書き）

隣のクレイジーガール〜藤田と宮島〜の番外編です。本編を読んでいただいてからの方が良いと思います、と堂々と言えたらいいなと思います。本編もよくわからないので結局は何から読んでも変わらないと思います。．．．はいすみません、順番に読んでいただけると幸いです。

おまけ？

これは俺が小学校に上がってすぐの話。

本当に隣に住む藤田だけが知り合いだった頃の、今思うと可哀そすぎる友人関係をもっていた俺は、なかなかクラスで馴染むことができなかった。女子は愚か、男子でさえも余りに活発すぎてついていけなかった。

そういうときにいつも絡みつくのが、いわゆる苛めと言う類いだ。まんまとそれに引っかかった俺は、一時期日常的に人から避けられるようになってしまった。

その原因である奴はいつものように俺んちの居間のコタツで堂々と煎餅を頬張りながら、俺をにらみつけた。

「何、一人でぶつくさ言ってるの」

「いや、ちよつと昔のことを思い出して・・・」

そういつて藤田の右隣に腰をおろした。

「ふーん。あんたって昔からあたしがいないダメよね」

「・・・俺耳と頭がどうかしたかもしれん」

「そりゃ前からよ」

冗談だよばか。あと遠回しに藤田の間違いを指摘してるのに気付いてくれ。

「そーいや、あたしあんたを助けたような・・・」

俺はふとさつき思い出したことを、煎餅片手に再度鮮明に回想してみた・・・

・・・
・・・
・・・

「へん、みやじまダッセー。こんな簡単なかけっこでこけてやんの」

「いいじゃん、みやじま鬼ごつこの鬼なら皆つかまんないもんな」
砂場で盛大に（滑って転んだのではなく）バク転をかまして着地に失敗した（と俺は思っている）俺を寄って集って男子は笑っていた。

言い返しても更にネタにされて無駄になると学んだ俺はじつとその場に居座った。しかし、頑丈な心までは習得出来なかったため、大抵こうして何分か経つと男子の嘲笑う視線に負けて泣いてしまった。

今回も、正しくそのパターンで体育座りをして俯き喉と目頭に込み上げる熱い何かを吐き出した。

「・・・うつ、くう・・・」

「でた、おいまた泣いたぜ」

「男は泣き虫じゃ生きていけないってとーちゃんが言ってたぞ」

「そーか、じゃあみやじまは男じゃないのか」

また笑いの渦が俺を取り囲んで・・・もうどうしようもないとおもつと更に目が痛くなりいっその事死んじやいたいと切に思っていたとき、右の方から男子の悲鳴と砂場に倒れる音がした。

洪水のような臉を必死に袖で拭うと、視界には倒れた男子に馬乗りになつて藤田が見えた。

「こんなよわつちくて、何が男だ。あたしに勝てないとか、ダッセーのっ」

一回男子の上で跳ねると、ウゲツと蛙の潰れたような声がした。

「うわぁ、がっちゃん大丈夫か！」

「んだよ藤田、俺ら五人とお前一人じゃ絶対勝てねーよ」

そーだそーだ、とブーイングが起きてる中、藤田は悠々と俺の前に立ちはだかった。

「・・・うつ、み、みおちゃん・・・」

今でも覚えてる。そう、あいつは可愛く笑って――

ゴツチン、と俺の顔は派手な音を立てた。

藤田に殴られたことが俺の目を真ん丸くさせて、痛さをも忘れさ

せた。

周りの男子は呆氣にとられてものも言えなかった。

「瞬ちゃん、痛い？」

俺は一も二もなく頷いた。

「それじゃ、あたし殴っていいよって言ったら殴る？」

いや、そんな無謀な仮定やめてくださいよ。

「・・・な、殴れないよ・・・」

その答えに安心したのか、周りの男子に言う。

「ほら、こういう女子を殴れないような奴がホント男だよ。見習いなさい」

別に女子だからって訳ではなく・・・という俺の弁解はきつと言わなくても皆に伝わっているはず。

すると、遠くから数名の女子と担任の若い女の先生が駆けてきた。

「せんせー、ほらまたみやじまクンがガッちゃんやよっちゃんに苛められてます！」

「いつも言ってるのに先生信じてくれない」

「だって、吾妻くんや良也くん達がそんな事してるとは思わなかったから・・・あら、あなたたち何やってるの！」

先生の呼びかけに藤田の呪縛から解放された周りの男子たちは、いつものように一瞬で顔をしかめさせて今にも泣きそうな顔をつくった（この早業で役者になれると思うようになってきた）。

「せ、せんせ・・・俺はただみやじまと遊んでただけで・・・」

「本当ですよ、鬼ごっこやってて。それでこいつここでこけたから助けよう」と

先生は困った表情をさせて俺の顔をみた。

「本当なの？瞬くん」

結局いつもの通り、証拠のない俺一人の言うことなんかきいてくれないだろう。まるでマニュアルがあるかのように俺は言った。

「いや、ただこけただけで・・・」

「証拠、ありますけど」

藤田は堂々と俺の台詞を遮った。そして、思いつき俺の顔をセ
ンサーに近づけた。このとき女の先生はいい匂いがするなーと思っ
たのは内緒だ。

「ほら見てください、この口の端が切れて血が出てるでしょ。あが
つまになぐられたんですよ」

血？それってがっちゃんじゃなくて・・・まさか。

「あら、ホント・・・吾妻くん殴ったのね」

「えっ？俺殴ってねーよ・・・ってゆーか殴ったの藤田じゃん！」
がっちゃんは見る見るうちに顔を真っ赤にさせて叫んだ。

「え、ええっ？未央ちゃんそれは」

嘘なのに堂々と勝ち誇ったように言った。

「せんせ、騙されちゃダメ。だってあたし瞬ちゃんを助けるために
行っただよ。それであがつまが瞬ちゃん殴ってたからあたししか
えしにあがつまに馬乗りしたんだもん」

「いや、されたけどね。それは違うじゃん！」

「されたの？やっぱり吾妻くん殴ったのかしら」

なんて、恐ろしい女なんだろう・・・これじゃあ先生がガッちゃ
んを疑ってしまうのも当たり前だ。

「とにかく吾妻くん良也くんたちはちよつと先生のところに来なさ
い。宮島くんのことについて話があるわ」

「ええ——っ！」

文句を言いながらも仕方ないのかももう大人しくついていった。俺
と同じく藤田の策略にはまってしまったのをもう諦めたのだろう。

女子も去って行き、俺と藤田だけが砂場に残った。

一応助けてもらった、というのだろう。

「ありが・・・」

「ちよつと強く殴りすぎた」

藤田は俺を何故か睨みつける。

「もしあたしが苛められたときに、あんたに助けてもらっただから
今あやまらないでよね」

これが一頭最初に藤田の照れ隠しだと分かった瞬間だった。

・

・

・

「あんなに昔は照れ隠しが可愛かったのに・・・」
ため息をつく、突如隣の赤面した奴からアップーが飛んできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5994q/>

隣のクレイジーガール～藤田と宮島～

2011年2月2日22時52分発行